



上智大学創立 100周年  
上智短期大学創立 40周年  
上智社会福祉専門学校 50周年



## インドシナ難民募金

No. 6

### 1. 世界で起こる悲惨な問題に取り組む

「ボート・ピープル」。いまにも沈没しそうになる漁船やボートにのって海上に逃れてきた人々で



写真提供 UNHCR/B. Boyer

ある。1975年インドシナ三国（ベトナム、ラオス、カンボジア）が社会主義体制に移行すると、体制になじめない人びとは、難民となって隣国タイや小型船に乗って海上に逃げ出した。特にベトナムからの難民を「ボート・ピープル」と呼んで、新聞・テレビなどで盛んに報道されていた。1979年難民の惨状がピークに達すると、上智大学の中でも「自分たちも何かできることがないか」という声が高まってきた。その年の12月1日、「インドシナ難民に愛の手を 上智大学」が設立され、上智大学全学で取り組むことになった。

### 2. インドシナ難民問題を大学全体の活動として

1979年11月28日の大学評議会で、インドシナ難民救援活動の第一段階として、上智大学が全学を挙げて募金をする事が決定された。募金活動を開始するにあたり、まず12月5日に講演会と写真展を開き、難民の現状を広く紹介した。続いて7日に募金のためのボランティアの募集を開始。学内にあったさまざまなボランティア団体がこれに賛同し、呼応した。また「学習院大学カトリック研究部」も本学の趣旨に賛同するなど学内外にも輪が広がっていった。

12月10日からは学内に募金箱を設置し、正門、北門などで募金の呼びかけを行なって活動を開始した。12月17日から22日までの新宿駅の西口と東口での街頭募金では、



新宿駅で街頭募金を行うヨゼフ・ピタウ学長（当時）

当時のヨゼフ・ピタウ学長も先頭に立ち、延べ400人が参加した。この活動は

マスコミにも取り上げられて報道され、全国から銀行、郵便局を通して多くの募金が寄せられた。上智大学は募金の目標を300万円に置いたが、次の年の1月18日には総額1千104万6116円となった。

ピタウ学長は12月25日までに集まった750万円のうち700万円を持って、タイ国のカトリック司教団に手交するために27日にタイに旅立った。28日には渡部清文学部助教授（当時）も学長に同行するためタイに出発。この募金は、カトリック緊急難民救済事務所が難民のために建てる学校の建設資金に当てられた。



このときピタウ学長はタイのカオイダン、サケオの難民キャンプを視察して、もっと必要なのは顔の見える人との交わりだと気づき、現地での上智大生のボランティア活動の可能性を調べた。そしてサケオキャンプでの受け入れが決まった。学長は帰国後の報告会でこう述べている。

「上智の学生たちも、子どもたちの兄さんや姉さんとして、一緒に遊び、衣服の世話、洗濯、あるいはシャワーを浴びる手伝いなど、十分役に立つ仕事ができるのではないかと思った。学生たちは、何かを与えると同時に、この愛と無私の奉仕の雰囲気の中で、多くのものを与えられるに違いない。」



### 3. ボランティアは与えることでなく、ともに生きること

ボランティアが派遣されたのはサケオ難民キャンプのカトリック緊急難民救済事務所が担当している児童センターで、孤児や家族と離れ離れになったカンボジアの子どもたちが 1200 人ほど収容されていた。受け入れに当たっては「継続してボランティアを送る」ことが条件だった。ボランティア募集は、ピタウ学長帰国後の 1980 年 1 月 11 日の報告会の席上で行なわれたが、関心は高く、すぐに約 500 名ほどの応募者があった。ボランティアの第一陣 (1 グループ 10 名の編成) は 2 月 3 日に出発。以降 2 週間交代で、本学学生ばかりでなく、父母、教職員、他大学生などを派遣した。第一陣を送ったころには子どもたちは約 300 人ほどに減少していた。4 月上旬には子どもたちは多くが里子として引き取られたため、チルドレン・センターは閉鎖となった。そのため 4 月 13 日出発の第 6 陣以降は、バンコック市内のトランジットセンター (外国に移住する可能性のある難民の一時的な収容キャンプ) に移り、音楽、ダンス、語学を教えたり、バンコックのスラムや孤児院で、またインカイのラオス難民キャンプで働いた。



出発前には初歩的なクメール語の授業が行なわれ、現地での仕事は子どもの教育、一緒に遊ぶこと、シャワーを浴びせることなどであった。2 月から 10 月まで延べ 150 余人のボランティアを現地に派遣したが、応募者が激減したうえに、現地の状況や要求に応じきれなくなったため、第 17 次派遣隊をもって終了することを決めた。

当時の赤波江春海副学長は「ボランティアに望まれることは、何かをしてあげるといふより、自



写真提供 めぐこアジアの子どもたちの自立を支える会

分の眼で難民の悲惨な状態を直視し、ともに生きることで、彼らに心を開く真の人間としての連帯感を持つことができることだ」と語っている。実際、参加した学生も「大学では学べないことを学んだ。日本という国のなかでしか物事を考えることができなかつた自分が恥ずかしい。こんな恵まれた国の中で生活していながら、どうして不平不満を持って生きていたのか分からない」と述べている。上智大学がアジア重視の方向性を示して具体的に行なわれたこの救援活動は、その後、研究機関であるアジア文化研究所や社会正義研究所の活動、学生のアジア子ども

も支援サークル「めぐこ」などに引き継がれていく。